

大学生の運動・スポーツ指導と運営に関する実践課題 —アクティブ・ラーニングによる民間企業との連携協働に着目して—

常行 泰子 (高知大学教育学部)

The practical tasks about exercise/sport instruction and management by university students: focusing on the cooperation and collaboration with private enterprises through active learning

Yasuko Tsuneyuki (Faculty of Education, Kochi University)

要 約

本研究の目的は、民間企業との連携協働に着目し、大学生における運動・スポーツの指導と運営における実践上の課題を検証することであった。2015年4月から2016年5月にかけて、A大学学生9名(学部3年生5名、4年生4名)を対象に実施した。計画・立案から再修正に至る過程はPDCAサイクルを用いて分析し、グループインタビューと記述レポート及び授業評価アンケート、学生が実施した体験イベントに参加した地域住民に対する質問紙調査を併せて、質的量的に検証した。アクティブ・ラーニングによる教育効果、大学授業を活用した運動・スポーツ事業による地域貢献、民間企業との連携協働により大学の付加価値などの便益がある一方で、広報・集客、チーム連携、指導スキル、コンプライアンス等の課題が抽出された。教育機関と企業団体との連携協働には、学生と大学、企業団体が公平公正な立場から事業を遂行する必要性が示唆される。

キーワード：アクティブ・ラーニング、スポーツ指導、地域貢献、連携協働、学生教育

I 緒言

学生教育に活用されているアクティブ・ラーニング(Active learning, 以下ALとする)は、異世代と連携協働した授業開発(岐美ら, 2016)やICT(佐藤ら, 2016)、SNS(高橋, 2015)の活用等を含め、能動的学習の機会として多様に進化しつつある。大学を始めとする高等教育機関では、講義における一方的な知識伝達型の授業スタイルと比較して、教員と学生、学生同士を含めた双方向の学習機会が有用な教育手法として重視されている。このうち保健体育分野におけるALの学習機会には、現段階で「ダンス」「体づくり運動」等の領域を中心にいくつかの研究蓄積がみられるようになってきた(白井, 2016; 佐藤ら, 2016)。しかしながら、それら以外の領域におけるALの意義は未だ十分に実証されているとは言えず、学生教育へ還元することを前提としたさらなる研究進展が期待される。

今後の大学体育が果たす役割を検討する上で、スポーツ庁初代長官である鈴木大地氏の「スポーツ政策と行政の立場からみた大学におけるスポーツ振興の検討方向案」(鈴木, 2016)が一つの示唆を与える。学生へのスポーツ教育の充実、カリキュラム・教育手法、教育体制の充実(スポーツボランティア育成、障害のある学生への教育)と共に、大学スポーツを核とした地域活性化や人材・施設等の利活用(まずは国立大学)等の議論がなされており、学生・教員・指導者といったスポーツ資源の有効活用が指摘されている。これは単純な地域貢献だけに終止するのではなく、学生における指導経験や運営に関わる実践的な学び場として、大学が地域や学校を含めた重要な教育と研究の拠点になり得ることを示唆する。すなわち、教員やスポーツ指導者を目指す実践的な学習機

会は、大学が持つハードとソフト両面の資源活用を含め、学校と近隣地域を包含する地域活性化の有効な手段ともなり得る。地域貢献を含めて実施される正課授業や課外活動、大学における運動・スポーツ事業はいくつか展開されているものの、詳細な事例報告は現段階でほとんどみられない。

よって本研究では、大学生を対象に学外の団体と連携協働して行う実践的な正課授業をアクティブ・ラーニングの場として位置付け、事例報告する。新たなスポーツの開発、地域住民を対象とした体験イベントにおけるスポーツ指導・運営、フォーラムでのプレゼンテーション等を通じて、初年次に得た知識から思考・判断・表現へと至るプロセスを分析し、実践上の検討課題を示す。本研究の目的は、民間企業との連携協働に着目し、大学生における運動・スポーツの指導と運営における実践上の課題を検証することである。

II 研究方法

1. 調査対象・期間

2015年4月から2016年5月にかけて、A大学でスポーツ社会学研究室に所属する大学生9名（学部3年生5名、4年生4名）を対象に実施した。計画・立案から再修正に至る過程は、大学生を対象にキャリアプランニング教育実践を行った上原（2015）のPDCAサイクル「学生は自ら自己の目標を設定し（Plan）、目標達成の活動プロセスや成果を記録し（Do）、その記録を基に達成度を評価し（Check）、そこでの改善策や今後の活動計画を作成して実行していく（Action）」一連のフローを参考に設定した。本研究では、Plan：I期（2015年4－7月）、Do：II期（2015年8－11月）、Check：III期（2015年12月－2016年1月）、Action：IV期（2016年4－5月）に区分したそれぞれの期間を以下の主要な事業内容に適用した。

I期：B新聞社及びC協会との打ち合わせ、プログラム企画立案

II期：地域住民を対象としたニュースポーツ体験イベント開催、イベント参加者を対象とした質問紙調査、新聞社4社が合同開催するフォーラムにおけるプレゼンテーション

III期：振り返りとまとめ

IV期：前年度の確認と再修正

さらに、大学生の運動・スポーツ指導と運営に対する評価については、2015年7月30日と8月2日に実施したニュースポーツ体験イベント参加者45名（男性15名、女性30名）を対象とした。イベント体験会終了直後に質問紙調査を行い、イベントの楽しさやニュースポーツの運動強度、学生スタッフの対応等について地域住民の質的・量的評価に関する情報を併せて収集した。

2. 調査方法・内容

本研究は、A大学の学部3年生と4年生を対象とした正課授業である専門演習を中心に、課外授業を含めた学習機会を調査フィールドとして設定した。大学生を対象としてグループインタビューを行った後、個別に記述レポートを課し、情報を収集・整理した。授業評価については、A大学で適用される授業評価アンケートを用いた。授業に対する意欲や満足度を尋ねる全授業共通の質問（「あなたは、この授業に意欲的に取り組んでいますか」「あなたは、この授業で身につけることを期待した知識や能力を得ていますか」「全体としてこの授業にあなたは満足していますか」など12項目）と授業分野ごとの質問（「地域住民と一緒にいるスポーツ活動について、意欲的に取り組みましたか」「授業や研究活動を通じて、地域に貢献する重要性を感じましたか」「スポーツを通じた社会貢献を今後も実践したいと思いますか」の3項目）を尋ねた。

地域住民を対象とした質問紙調査項目は、性別・年齢の個人的属性と、ニュースポーツ体験イベントにおける楽しさについて「とても楽しかった（4点）」から「まったく楽しくなかった（1点）」

までの4段階リッカート尺度で尋ねた。運動強度については、RPE (Rated Perceived Exertion: 主観的運動強度) を適用し、「非常に楽であった (1点)」から「非常にきつかった (7点)」までの7段階リッカート尺度で尋ねた。「スタッフの対応」については「とても良かった (4点)」から「まったく良くなかった (1点)」までの4段階リッカート尺度で尋ねた。最後に、自由記述欄において意見と感想を尋ねた。

Ⅲ 結果

1. 全体の経緯

I期：2013年8月からSNSで公開していた地域向け科研費事業の情報を把握したB新聞社からの提案で本事業は開始した。2015年4月、大学とB新聞社の担当者が打ち合わせが行われ、C協会を含めた連携協働によるニュースポーツ開発、体験イベント実施、フォーラム開催、予算と権利関係等について議論された。ステークホルダーに関する事前調査を行ったところ、C協会は、実質上B新聞社の取引企業にあたる広告代理店D社の社員が代表を務めていることが明らかになり、コンプライアンス上留意する点があることに気づいたA大学の担当者より「可能な範囲内に限定して」協力する旨を返答した。ニュースポーツ開発は3団体による合議を進め、スポーツと地元県のカラを踏まえて決定された。野球とカツオの一本釣りを組み合わせたスポーツが代表種目として選出されたが、ドッジボールとよさこいを組み合わせたスポーツ、芋けんぴとダーツを組み合わせたスポーツ等多種多様な種類が合計4種類開発された。

II期：ニュースポーツイベント体験会は、A大学体育館を利用して実施された。調査対象である大学生以外にも「生涯スポーツ論」「スポーツ社会学」の授業履修者から大学生2名（うち1名は台湾の留学生）がアシスタントとして参加した。子ども・高齢者・学生の友人や知人・中国とフィンランドからの留学生を含めた幅広い世代の参加者がみられた。受講者は体育館入口付近にて受付を行い、参加者同士の交流やウォーミングアップを兼ねた軽運動を行った後、ニュースポーツを体験した（図1）。終了後は写真撮影と質問紙調査へ記入して解散した。プログラム開発からイベント実施に至るまでの期間、B新聞社が取材を行い2回新聞報道がなされた。

III期：K県T市においてフォーラムが開発され、A大学にて本事業をすすめた学生9名が参加、うち3名がプレゼンテーションを行った。真珠とサッカーを組み合わせた他大学学生によるスポーツ等を含め、地域を活性化させるスポーツの意義についてディスカッションを行った。フォーラム終了後には参加学生全員がレポートを記述し、すべての議事録を含めた報告書を作成した。

IV期：I～III期で学習した内容を振り返り、学生による運動・スポーツ指導と運営に関するディスカッションを行った。地域住民を対象とした健康づくりに貢献する運動・スポーツの企画運営が、今後の計画として提示された。

2. 学生による振り返り

フォーラム終了後に学生が記述したレポートと反省会を含めたディスカッションの主要な結果を以下に示す。（下線は筆者による）

◆ 今回、このプロジェクトに参加をして様々な経験ができました。自分たちで、ゼロからスポーツを作り、体験会を行い、フォーラムで発表する。その中で、たくさんの困難にぶつかり悩みましたが、その壁を乗り越えるごとに私たちの絆は確実に強くなっていました。大学のゼミ活動が今後も忘れられない思い出になりましたし、教師になって、この話を生徒にしようと思いました。（4年生 女子）

◆ フォーラムで発表させてもらって、①動画をもっと工夫して撮れたら良かった ②高齢者に視

点を合わせていた気がして、活動量が少なく、子どもから高齢者まで、幅広く満足できるような工夫ができたらなお良いと思った。鳴子ドッジは個人的に好きで、芋けんぴでダーツもいつかはちょっとはやってみたい。イベントを企画、運営する経験ができたことは大きい。(3年生 女子)

- ◆ 今回のプロジェクトを通して、たくさんの人にスポーツを楽しんでもらうために「おもてなしの心」が大事であることやおもてなしするためには、事前の準備がとても重要であることを学んだ。今後も「おもてなしの心」をもってスポーツの指導にあたっていきたい。(4年生 男子)
- ◆ ニュースポーツを考案する中で、さまざまなものからヒントを得て作りだすのがすごくおもしろかったが、ルールや道具のところは難しく感じました。体験会を運営していくうえで、細かいところの配慮が大切だと知りました。全体を通して、もっと想像力をつけていかなければならないと感じました。(3年生 男子)
- ◆ 今回のプロジェクトを無事終えることができてよかったですと思います。自分自身あまりプロジェクトに貢献できなかったのかなと感じましたがやれることは精一杯できたのかなと思います。こういういい経験を今後いかしていきたいです。(4年生 男子)
- ◆ プロジェクト全体を通して一つのプロジェクトを成功させるために、多くの時間があるし、多くの人の協力がなければ成功しないことを学んだ。個人的には一回一回の活動の記録をしっかり取らないと、今までどのようなことをしてきたのかわからなくなるので記録をする大切さを学ぶことができとても良い経験になった。(3年生 男子)
- ◆ とてもやりがいのあるプロジェクトだった。一本釣りベースボールの完成度が高くなっていくにつれて、達成感や充実感を味わうことができた。またイベントを運営することの大変さや気配りの大切さなど学ぶことも多くあった。フォーラムでは、大人数の前でスポットライトを浴びて話すことができたので、人数で話すことに免疫がついて教員になったときに役立つと思った。(3年生 男子)
- ◆ 今回の体験は自分にとって初めてのことであり、多くのことを学ぶきっかけができた。特に7、8月に行われた体験会での反省点は今後に生かしていくことができると思う。フォーラムで他大学のプレゼンを見て、自分たちにはユーモアが足りなかったように思う。でもみんなで協力しながらゼロから何かを作り上げることができてよかったですとおもう。来年も継続してやっていったらもっと良いものができると思う。(4年生 男子)

3. 学生による授業評価とグループディスカッション

授業評価アンケートでは、(1) 全授業共通の質問「10. 学問的興味・関心が高まった (平均4.67点/ 5点満点)」、「11. 授業で身につけることを期待した知識や能力を得た (平均4.33点/ 5点満点)」などの項目が高い得点を示した。授業分野ごとの質問「B. 授業や研究活動を通じて、地域に貢献する重要性を感じた (平均4.78点/ 5点満点)」、「C. スポーツを通じた社会貢献を今後も実践したい (平均4.67点/ 5点満点)」などの項目においても、高い得点が明らかになった。

振り返りレポートに記載された言説やグループディスカッションの分析から、学生の行動変容が明らかにされた。「一つ一つ試行錯誤を重ねたため、最後は毎日の昼休みと休日を全部使って仕上げた。学生としても良い経験になったし、高知の人がスポーツに親しむきっかけにしてもらえたらうれしい」(高知新聞2015年9月30日付朝刊)、「自分たちが開発したニュースポーツで、多くの幅広い世代の方々が楽しんでくれて嬉しかった。仲間と協力して工夫したり、試行錯誤したことは、たいへん貴重な経験でした」(季刊高知第59号、pp.57) など各種メディアを通じて学生の意識や行動変容が報告された。

グループディスカッションでは、「集客がたいへん」「キャンパスで声をかけても聞いてもらえない」など広報の難しさによる言説が最も多く示された。また、A大学学生をC協会が「監修」といったB新聞社の文言に対して「上から目線ではないか？」などの意見が出され、すべての関連団体が、公平な立場で事業をすすめる必要性が出てきた。さらに、人権への配慮や道徳的側面から文字表記が難しいC協会の文言に対しても意義が出され、各関連団体の共通認識のずれが浮き彫りになった。

4. 地域住民を対象とした質問紙調査結果

ニュースポーツ体験イベント参加者は全体で45名であり、そのうち66.7%は女性、33.3%は男性と女性の参加者が多くみられた(表1)。また、年代は10代が31.1%と最も多く、次いで20代(22.2%)、70代(15.6%)であった。ニュースポーツの楽しさについては「とても楽しかった」(86.7%)、「まあ楽しかった」(13.3%)と、参加者全員が楽しさを享受している結果が示された(図2)。運動強度については「非常に楽」が最も多く、「楽」(27.9%)「かなり楽」(23.3%)であった(図3)。学生スタッフの対応は、「とても良い」(93.3%)、「まあ良い」(6.7%)と受講者全員が満足している結果が示された(図4)。自由記述については、以下に原文を示す。(下線は筆者による)

表1 ニュースポーツ体験イベント参加者の属性

	10代	20代	30代	40代	60代	70代	合計
男性	9(60.0%)	3(20.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(13.3%)	1(6.7%)	15(33.3%)
女性	5(16.7%)	7(23.3%)	3(10.0%)	3(10.0%)	6(20.0%)	6(20.0%)	30(66.7%)
合計	14(31.1%)	10(22.2%)	3(6.7%)	3(6.7%)	8(17.8%)	7(15.6%)	45(100.0%)

数字はn数 ()内は%

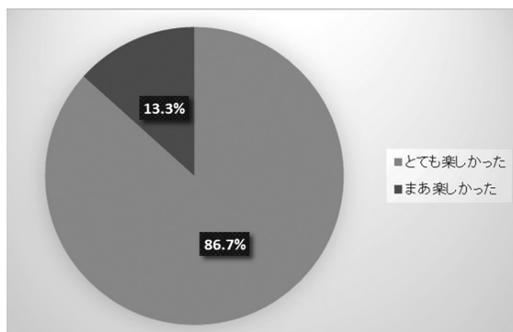


図1 ニュースポーツの楽しさ

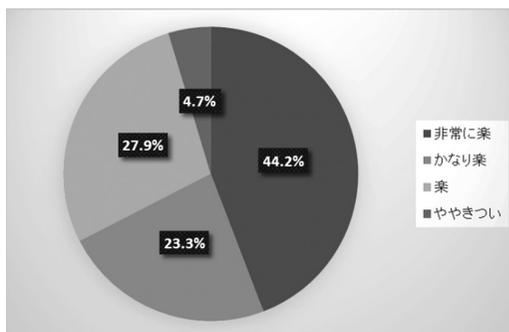


図2 ニュースポーツの運動強度

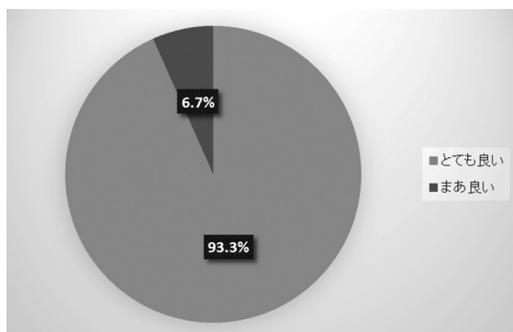


図3 スタッフの対応



図4 ニュースポーツ体験イベント

- ◆ とても楽しかったです。よく工夫されていて、ご苦労さまでした。小さい子どもさんも高齢者も幅広い年齢層が参加出来てよかった。「鳴子ドッジボール」は、鳴子に手を触れないで競技した方がスローモーションでもっと（難易度）面白いと思います。・・・とても楽しくて良かったです。(60代・女性)
- ◆ 汗をかきさわやかさが残りました。(60代・女性)
- ◆ とてもおもしろく、朝の体の運動にも良かった。(10代・男性)
- ◆ 久しぶりに大学に来て楽しかったです。(60代・女性)
- ◆ 目先の変ったゲーム趣向が良かったと思います。(60代・女性)
- ◆ 鳴子ドッジボールは、ルールがわからない方がゲーム中にもいました。一本釣りはとても工夫が効いていて楽しかったです。(40代・女性)
- ◆ 1本釣りの後半せんをしたい。(10代・男性)
- ◆ ストレス解消になり、とても楽しかった。又機会があればぜひ参加したいです。(60代・女性)
- ◆ ルールがよく分からず、戸惑った。(70代・男性)
- ◆ とても素晴らしかったです。見知らぬ人との交流ができてとても良かったです。(10代・男性)
- ◆ もう少しきついレベルでも良いと思います。(60代・男性)
- ◆ つりの事はとても楽しかったです。良かったゲームでした。(20代・女性)
楽しかったです！みんながルールをしっかりと覚えれるともっと楽しめたかなと思います。1回練習してからでもよかったかも。(20代・男性)
- ◆ 本当に良かったです。また言ってください。参加したいです。(20代・男性)
- ◆ とても面白く楽しかったです。また参加したいです。(20代・女性)
- ◆ 初めて参加しました！とても楽しかったです。また機会があれば参加したいですー！ありがとうございました。(20代・女性)
- ◆ だれでも出来るゲームで良かったです。(70代・女性)
- ◆ たのしかったです。またきてあそびたいです。(10代・女性)
- ◆ サッカーのぶんも作ってください。(10代・男性)
- ◆ こういった体験の機会は、多い方が良いと思う。(60代・男性)
- ◆ 学生スタッフさんととても元気がよかったですので、はじめに自己紹介をしていけば、もっといろいろな人がはいりやすいと思いました。声の掛けあいなどもよくできていたので、たいくつせずに参加できたと思いました。あと曲をかけているのもよかったと思います。気分ももりあがりました。学生スタッフさん名札とかつけてみてはどうですか？したしみやすいと思います。(20代・女性)
- ◆ とても面白くて、楽しかったです。また参加したいと思います。(20代・女性)
- ◆ 説明が分かり易く、孫たちもよく理解できた。家族みんなで楽しいひとときを過ごせました。ありがとうございました。(60代・女性)
- ◆ 久しぶりに身体を使った運動をしたのでとても楽しかったし、子供たちのふれあいができて良かったです。ありがとうございました。(70代・女性)
- ◆ 幅広い年齢層が集まり、皆で楽しめるスポーツはなかなかないので、地域に広めて欲しい。(30代・女性)
- ◆ 子供からお年寄りまで一緒に楽しめるのでとても良いと思いました。(40代・女性)
- ◆ 知らない人とも仲良く協力してできるスポーツのように感じました。(30代・女性)
- ◆ 大人でも子どもでも楽しめるようにしてくれていたのよかったです。(10代・女性)
- ◆ 子供さん達といっしょにとっても楽しかったです。(70代・女性)

IV 考察

本研究の結果から、広報・集客、日程調整を含めたチーム連携、指導スキル、他団体との共通認識に関する課題が抽出された。特に、体験イベントの集客を目的とする事前の広報活動に関しての難しさが明らかになり、地域住民と大学生が日常的に接する機会の増加が求められる。他の履修科目との兼ね合いで学生同士の日程調整等が困難な場合もあり、学生・教員も含めて土日の課外時間を利用しなければならなかった。適切な授業時間数と課外学習を考慮した学習機会を適切に設定する必要性が指摘された。イベントに満足している参加者は多く、学生や家族との交流を楽しんだ意見も示された。ルール説明や進行については学内学習を含めてさらに指導スキルを向上する必要性も推察される。また、本研究で連携協働したC協会では、障害者や子ども・高齢者を含めた生涯スポーツを遂行するにあたり、倫理的・道徳的側面と安全性から多大な問題を孕んでいる種目がいくつかみられた。一定の条件の下、慎重に連携協働する必要性が極めて高かった。民間企業との連携協働には、教育領域における健全な倫理観や道徳観を遵守する各団体の共通認識が必要不可欠と考えられる。

授業評価からは、アクティブ・ラーニングを用いた教育の機会に対して学生の満足度が非常に高い点が明らかになった。特に学問的興味・関心が高まり、授業で身につけることを期待した知識や能力を得た等の項目が高い得点を示し、アクティブ・ラーニングを通じた教育の機会が学生のニーズに対応しており、能動的な学びを深める内容であった点が推察される。また、授業や研究活動を通じた地域貢献の重要性や社会貢献に対する今後の意欲なども高い得点であり、体育・スポーツを通じた授業による地域貢献が学生の学習意欲に多大な影響を及ぼしている状況が明らかになった。

地域住民を対象とした質問紙調査では、楽しさや運動強度に対する満足度は非常に高かったが、一方、ニュースポーツのルール伝達や展開方法について不安を感じた地域住民の意見が僅かにみられた。運動・スポーツ指導における安全性やルール伝達の課題については学生から報告されておらず、両者の齟齬については今後の検討課題といえよう。ロールプレイ等を用いた事前の学習方法と内容については再検討する必要がある。

本研究はB新聞社とC協会の関連性を踏まえ、研究の公平性・公正性を始めとするコンプライアンスに留意する必要がある。民間企業と連携協働する上で、コンプライアンスや日程調整を中心とする諸問題は出たが、寄附金の納入やメディア報道といったA大学広報上のメリットも挙げられる。村瀬ら（2015）は、「新しい価値を生むような産学連携の形を作り上げたいうえで、講義運営をすすめるのか」といった視点を投げかけている。教育領域において関連機関・団体と連携協働するには、学生と大学、関連する企業団体がWin-Winの体制で事業に取り組み、公平公正な立場から事業を遂行する必要性が示唆される。

V 結論

2020年東京オリンピック・パラリンピックを控え、一般市民における生涯スポーツの機会増加が期待されている。大学を取り巻く地域においても、高齢者や子ども、障がい者を含めた多くの人々が「安全で、効果的に、楽しめる」運動・スポーツのプログラムが重要と考えられる。健康や生きがいづくり、地域住民との交流の機会といった運動・スポーツによる地域貢献は、大学生や留学生の学習ニーズとも合致しており、今後の発展が見込まれる重要な教育の領域である点が指摘できる。学生の授業評価を精査して実践力養成に努めること、コンプライアンスを遵守する企業の選定やステークホルダーとの関連に留意して倫理的・道徳的側面に配慮した事業を展開し、地域活性化に多大な便益をもたらす教育の機会増加が今後の継続課題として考えられる。

謝辞

本研究は、平成25-27科学研究費助成事業 若手研究 (B)「運動初心者のニーズとフィットネス理論に基づく中高年向け健康運動プログラムの開発」(課題番号25870490)と平成28-30科学研究費助成事業 基盤研究 (C)「健康運動の指導法と地域活性化を目指す大学の運動・スポーツ事業に関する研究」(課題番号16K01623)の助成の一部を受けて実施されました。また、本研究を進めるにあたり地域住民の皆さまに多大なご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

引用・参考論文

本郷満 (2015) スポーツによる地域活性化, 体育の科学**65**(2), pp.119-123.

井澤悠樹 (2016) 地域貢献活動による大学に対する心理的態度の変容—スポーツ・レクリエーションプログラム参加者の保護者を対象として—, 東海学園大学研究紀要: 社会科学研究編, **21**, pp.1-11.

岐美宗・岩切裕哉・田上敦士・大高洸輝ほか (2016) オープンスクール公開授業の企画・実践による高専学生と中学生のアクティブラーニングの共同効果とその課題, 広島商船高等専門学校紀要 **38**, pp.31-39.

村瀬慶紀・渡邊聡・細井和彦・富田寿代 (2015) 大学は地域社会に如何に関われるのか?—「地域社会論 I」の実践から考察する—, 鈴鹿大学紀要**22**, pp.123-146.

佐藤豊・木原慎介・佐藤若・椿ちか子 (2016) 体づくり運動におけるアクティブ・ラーニングを促すタブレット (ICT) 活用ソフトの開発提案, 体育科教育学研究 **32**(1), pp.38-38.

白井麻子 (2016) コミュニティダンスのねらいとその実践例: 共に創り、共に踊り、共に存在する (アクティブ・ラーニングとしてのダンス: 主体・共生・創造 保存版! ダンス指導ハンドブック (7) アクティブ・ラーニングによる表現・ダンス指導事例集), 女子体育, **58**(8・9), pp.114-119.

鈴木大地 (2016) 今後のスポーツ行政と大学体育・スポーツに期待すること, 大学体育, **107**, pp.6-10.

高橋伸子 (2015) 多人数授業におけるアクティブラーニングの試み—インターネットサイトとスマートフォンを活用した授業報告, 社会学部論叢**26**(1), pp.37-48.

常行泰子・村田トオル (2015) 運動初心者のニーズに関する質的研究: 中高年向けフィットネス教室に着目して, 身体運動文化論攷**14**, pp.59-74.

上原克仁 (2015) キャリアプランニング教育実践報告, 総合教育研究センター紀要**14**, pp.79-93.

吉田毅 (2012) 東日本で被災したスポーツ集団の復興プロセス—被災の様相と復興への力—, スポーツ社会学研究, **20**(1), pp.5-19.